

水産試験場研究評価委員会 評価のとりまとめと機関の対応方針

(中間評価)

事業名 (課題名)	漁業調査試験 (漁況海況調査)				研究 期間	平成 17 年度～ (18 カ年)	予算 区分	県単
研究の取扱基準 A. 計画を超えて順調 (このまま研究を継続) B. ほぼ計画通り (このまま研究を継続) C. 研究方法を修正する必要あり D. 研究を中止する必要あり								
委員名	1	2	3	4	5	6		まとめ
評価結果	B	B	B	B	A	A		B
主な意見								
<p>①研究目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海洋観測を継続し、関係者にわかりやすく情報提供することは重要である。 ・漁況予測のために必要不可欠な漁業環境を各種観測データや調査船により調査している。 ・愛知県の重点研究目標「気候変動などの環境変化に対応した水産資源の持続的利用」にもよく合致していて妥当である。 ・観測結果や海洋構造の解析結果は、漁業者にとって重要な情報であり関心も高い。 ・海況を迅速に漁業者に伝えること、海洋構造のメカニズム解明を行うことは、操業及び資源管理にとって重要である。 <p>②研究手法の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査船や人工衛星等の幅広いデータを蓄積・解析している。 ・定期的に継続して調査を行い、データを収集することは研究の重要な基礎である。 ・湾内外の環境変化の関係性については、具体的な解析手法を早めに検討しておくことが望ましい。 ・計画的に調査を実施し、データの蓄積が進んでいる。また、データの解析も適正に行われている。 ・調査船や人工衛星による観測結果を収集して、情報提供や解析に利用している。 <p>③計画の進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観測体制は整備されており、予定どおりの進捗である。 ・予定通り黒潮大蛇行の影響による栄養塩の動向を把握できている。 ・内湾と外海間の海水交換、外海から内湾への栄養塩供給メカニズムなどは、今後、取り組むべき最も重要な課題である。 ・計画通りに各種調査とデータ解析が進んでいる。 ・湾口域の海洋構造のメカニズム解明に向けた、研究体制の整備が求められる。 <p>④研究の成果と発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁業者への定期的な情報提供や論文、学会発表が行われている。 ・観測等の結果や衛星情報を WEB ページで公表しており、発信している。 ・論文や学会での発表の他に、観測結果が海洋速報や漁海況月報として、WEB や FAX などでも発信されて役立っている。 ・観測結果の漁業者への情報提供、研究成果の論文報告及び学会発表が行われている。 ・外海域の海洋構造と栄養塩供給の関係が解明されて、その成果が公表されている。 <p>⑤今後の計画の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外海水が内湾に与える影響を今後の目標としており、目標は妥当である。 ・外海から内湾への流入機構等は重要な課題であり、今後の解明が期待される。 ・予定されている外海から内湾への流入メカニズムの解明に、是非、取り組んでいただきたい。 ・外海から内湾への栄養塩の供給メカニズムについては、関係者が注目している。 ・魚類資源と関連が深い栄養塩の動向を解明することは重要である。将来的には、外海から供給を受けた魚類資源の成育を、基礎生産力から予測する技術開発に期待する。 								

⑥総合評価（研究の取扱）

- ・外海水が内湾に与える影響について、多くの漁業者が関心を持っていることであり、今後の研究の進展に期待する。
- ・外海から伊勢・三河湾への栄養塩供給については漁業者にもあまり知見がなく、関心が高い事項であり、今後も黒潮の経路や流勢と湧昇流の関係など、更なる供給メカニズムの解明に期待する。
- ・今後も調査の継続と各種のデータを収集し、解析していくことで、新たな知見が得られることがかなり期待できるため、研究を継続されたい。
- ・本研究は気候変動などの環境変化に対応した時代の必要性にもよく合致した研究で、湾内のみならず外海までを含む観測点網でデータや調査結果を蓄積している点に特徴がある。ただし、現時点では湾内外の環境変動の関係性については、十分な解析はまだ進んでいないので、今後、黒潮の流路変動等が湾内の水温や栄養塩類などに及ぼす影響については、重要課題として十分に追及してゆくことが望ましい。
- ・引き続き観測結果を迅速に情報提供し、また海洋構造を解析することにより漁業に有益な情報が発信されることを期待する。
- ・外海域の海洋構造と栄養塩供給の関係解明が進んでおり、今後の資源管理計画への貢献度が大きい。湾口域の海洋構造は複雑であることから、解析には工夫が求められるが、収集した過去のデータ、人工衛星等の最新情報を駆使して、湾口域の海洋構造の解明を進めていただきたい。将来的には、外海から供給を受けた魚類資源の成育を、内湾及び湾口域の基礎生産力から予測する技術開発に期待する。

機関としての対応方針

渥美外海における海洋構造や対応する栄養塩の動向について解析をすすめた結果、変動の様子が明らかとなりつつある。一方、湾口部から内湾にかけての解析は、地形や潮汐など考慮すべき項目が多く、難しい課題であるが、関心の高い事項でもあるため、研究を進めていきたい。

委員の御指摘のとおり、栄養塩の動向については漁業者の関心も高いため、必要な情報の収集を継続するとともに、現在、水産庁事業による内湾の解析も始まっており総合的に解析を進めたい。